

<講演要旨>

交野古文化同好会結成40周年記念講演会

演題：古代の天の川と交野台地

講師：水野正好氏（奈良大学名誉教授）

交野古文化同好会結成40周年を記念して、去る4月15日（日）交野市ゆうゆうセンターの交流ホールに於いて、奈良大学名誉教授水野正好先生をお招きして「古代の天の川と交野台地」というテーマで1時間半にわたってご講演いただいた。450名の定員に対して立ち見が出るほどに大勢の方が集まって下さり、主催者側としては嬉しい限りでありました。お集まりいただいた皆さん方、本当にありがとうございました。開催した甲斐がありました。

先生と交野との関わりは古文化初代会長の奥野平次氏との出会い。関西電力枚方変電所から出土した遺物の陳列所、交野市史の編纂、創価学園や交野高校の発掘調査などいろんなところで交わりお互いに親交を深められ、古文化同好会でもお世話になりました。

レジュメの表紙になっている市役所別館の壁に掲げられている片山長三氏の描かれた古代の交野が原。中央右手に流れる天野川、その右岸の台地には交野郡衙があり、長宝寺が建つ。南面して左右に塔が建ち、金堂、講堂と並ぶ姿は薬師寺式の寺院に描かれている。天の川の上流に天田宮に磐船神社がある。古代の交野が原の様子が浮かび上がってくる。

昭和20年代奥野平次氏らが発見した押し型紋の入った土器が近畿では初めての物。一番古い土器である。1万2千年前の土器で神宮寺式土器の始まりである。縄文早期の土器である。それと同時に二上山からとれるサヌカイトの石器、獣の解体に用いたナイフである。大阪府の南端にある岬町の海から漁師が網にかかる焼き物、そして石。それは化石で動物の骨や牙などでナウマンゾウの化石であった。

一方、長野県信濃町の野尻湖から大量のナウマンゾウの骨・牙・歯などが見つかると、発掘が続いている。象の他にもオオツノシカの角や骨も見つかる。これらを捕って肉を食べるために解体に用いたナイフも見つかる。こちらは黒曜石である。氷河期が終わり縄文海進が始まる頃、今から1.2万から2万年ほど前にあたる。神宮寺遺跡も同じころである。

氷河期には海水面が今より130mも下がっており、瀬戸内海は干上がり、日本列島は朝鮮半島や樺太・千島列島とつながり、日本海は湖となって大陸から大型動物が行き来していた時期で瀬戸内に生息するナウマンゾウなどが岬町の沖合で墓場となっていたことを表している。同時に野尻湖でも同じ状態であったことなのである。

温暖化が始まると海面上昇がおこり、石切の下で急に3~4m下がる崖があることが近鉄東大阪線の地下鉄工事の時に見つかっている。東は石切・八尾、北は高槻、西は森の宮辺りに囲まれた地域は海となり、マッコウクジラの骨が多く見つかっている。

淀川に流れ込む天の川の下流部に伊香郷がある。息長氏の一族である。息長氏は天皇家の皇后を多く輩出した豪族で、本拠は滋賀県米原から長浜にかけての地域である。その上に田宮郷があり、田宮の津である。これも息長氏の一族田宮姫の里である。付近に万年寺山古墳、禁野車塚古墳などがあり、

大いに勢力を張っていた。その上に郡津があり、郡津の津である。台地には交野郡衙があり、長宝寺が建つ。またその上には船戸があつて、船戸の津で天野川の最上流の津である。ここからかいがけの道を上がり傍示から富雄を経て大和に通じる最短路である。

私部・私市の地名、この辺りは三宅郷とって天皇家の領地で、私部は皇后の為の領地、私市はこの地域で取れた米や物品の市が開かれたところであろう。倉治は蔵、年貢蔵があつた所だろう。

交野台地の北半分、淀川に面した地域。禁野、皇室領で狩場であるから馬を飼う。田口、山田などは渡来人の人々が住む。田口氏・山田氏が外来文化を持ちこみ、勢力を張っていった場所である。樟葉は淀川の津であり、高槻側へ渡る渡船場でもある。高槻には継体天皇陵といわれる今城塚古墳があり、茨木市の継体陵とされる三島藍野陵と比較されている。

継体天皇は応神天皇の 5 世の孫で父は彦主人王。大伴金村らによって越前から迎えられた。その使いに河内馬飼が使われている。淀川左岸には樟葉に牧野、右岸に上牧と馬を飼う牧場があつてそれに携わるのが馬飼である。四条畷にも馬飼があつたことが知られている。

4 世紀、神功皇后が三韓征伐で朝鮮半島に出陣、新羅を討ち百済・高句麗を帰属させたとき、牛・馬を求め日本にもたらされたと言われる。その後に馬飼・鞍作・馬具作などの集団が生まれていった。その集団が後、信州・甲斐などに進出していった。

第 2 京阪道路工事に伴う発掘調査で、朝鮮から渡来した須恵器が見つかる。堺に陶村があるが、焼き物の村である。交野にも入ってきていることを示すもので、鍛冶氏等とともに渡来人の進出を物語る。

枚方に渚がある。都が平城京から長岡京に遷都した頃、藤原氏も奈良から移ってきて交野台地に別荘をつくる。その一つが渚の院。また百済が滅亡した後日本に亡命してきた百済王たちは最初、四天王寺の辺りに住み、東北地方に進出して金抗を掘り当て金を献上、聖武天皇を大いに喜ばし、大仏建立に貢献したことで河内守となって枚方地方を賜り、百済寺を建てた。

平安時代、桓武天皇は度々交野を訪れ、郊祀壇を築いて交野の柏原で祭つたと言われているが片鉾だとか樟葉の交野天神社辺りかといわれているが何も残っていない場所不明である。

交野台地の南側は天野川一帯に古代交野の皇族を中心として栄えた地域であり、北の地域は古代から朝廷・渡来系豪族・貴族の栄えた地域とともに歴史豊かな天野川と交野台地であることが解つただけだと思います。

講演の後、質問がいくつか出ました。

七夕祭りについて、平安時代から生まれており、川の中で織機をおいて機を織る。それを神様が着る。天照大神も着ている。その後、牽牛、職女の話が中国から入り、牛と七夕が結びついたものである。七夕に関する地名では星田・妙見信仰等交野には多い。そして交野の柏原とは何処か。交野天神社、片鉾、杉など考えられるがどこにも残っていない。そして最後に交野の桜といわれるが、在原業平のうた「世の中にたえて桜のなかりせば、春のこころはのどけからまし」は渚の院に咲く桜をうたったものとされている。交野台地に咲く花とみればむべなるかなであります。

以上